

明末包攬の一考察

著者	鈴木 博之
雑誌名	集刊東洋学
巻	41
ページ	67-81
発行年	1979-05-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/00132259

明末包攬の一考察

鈴木博之

はじめに

非合法的な納税及び徴税請負行為としての包攬に関しては、主に清代以降を対象として、既に幾つかの專論が公にされている⁽¹⁾。それらの中でも指摘されているように、この問題が取り上げられる所以には、一つには所謂「郷紳支配」との関連から、包攬を「郷紳支配」の槓桿乃至属性として位置付けようとする視点が存在した。抑も、「郷紳支配」或は「郷紳的土地所有」の概念が、特に明代の賦・役制度史上から抽出されてきた問題であつた事を顧みる時、包攬の場合にも、先ず郷紳の出自の原点を成す明末の社会の段階に於て、その賦・役制度史上の歴史的意義を検討する事が必要であると思われる。

小稿では、明代嘉靖年間（一五二一—一五六）以降、特に江南地方に於て、郷紳層の持つ優免（徭役免除）の特権に關り、一般民戸とは賦・役制度上區別された存在として取り扱われるようになったと考えられる官戸⁽²⁾郷紳層の納税を中心として、郷紳層による包攬の萌芽的形態、又その前提的要因をその他の包攬との関連の中で考察してみた。

一

明末清初に於ける包攬には、既に指摘されているように、一條鞭法後も力役として残存し、名称の変更や役割の分化が進行していた里甲制諸役に、第三者が非合法的に代充するという形態が顕著に見受けられる。しかし、徭役に第三者が非合法的に代充する、或は積極的に徭役に充当するといった形態は、必ずしも明末に限られた現象ではなく、成化年間（一四六五—一四八七）には、「罷閑生員」が里長に充当したり、胥吏・老人等が「大戸」に充当して税糧・物料の中間搾取を行う例が見られ、正徳年間（一五〇六—一五二一）にも、物料等の種々の物品の両京への解運に當たる解戸に、「狡猾之徒」が計画的に充当し、支払われた価銀を着服したり、物料を転買して利益を計る事が指摘されている⁽³⁾。これらの場合には、徭役に當る事自体に、何らかの利益を生ずる余地が存在する状況にあつたと考えられる。しかし、一般的に徭役の負担が過重になると共に、役得の側面を残しながらも、一般民戸が直接の就役を忌避し、遊閑無頼の徒を雇募し、代理就役させる形で包攬が主流となり、それも里甲制諸役の

中で特に負担の重い部分から漸次波及していく過程が看取される。既に嘉靖初年には、漕運法の改革後もそのまま両京への民運の形で残された白糧——官中の用米や官吏の俸米等に充てられる糧米——の解運に当る糧長が自ら就役せず、「光棍」を雇募して代替させる事から、納入の爲の費用の浪費や借財が問題となっているが、⁽⁶⁾明末には、税糧徴収の基本単位をなす糧長・里長にまでそれが拡大して行つた。即ち、均田均役法の進行途上にあった嘉興府・海塩県では、万曆二十九年に知県李当泰が次のように述べている。

一。縣内有等無籍棍徒。戸無寸土。兇攬鄉惡產戸田地。每畝先索落甲銀一錢。認作甲首。包當里役。及輪該見年或糧長上卯。每畝復索幫役銀。每年收糧。米算加三。銀算加二。收侵入已。竟不完官。累糧長。比較後。有侵入。告扳甲戸代賠。最可痛恨。(天啓海塩縣圖經・卷六・食貨編第二之下・役法・前任李編審事直)

全く土地を持たない無頼のならず者が郷民の財産を有する戸の田地を包攬し、畝ごとに甲銀一錢を請求受領して甲首に代充する。そして輪番の見年(里長)や糧長が税糧を徴収する期日になれば、更に幫役銀を受け取る外、收糧の時には米であれば三割増し、銀であれば二割増しの糧銀を徴収しながら完納せず、その侵欠を本来の糧長や甲戸に賠償させていた。又、崇禎松江府志卷十一・役法一・華亭県知県鄭友玄の「經催十甲均辦議」(崇禎二年)にも、

蓋十甲輪役。彼此互缺。則承役之年。一人代十甲以償道。而中人之產立盡。且充役如此。其苦則大家園卸目前。利人包辦。而無田赤棍。恣意索貼。貼一入手。恣意收侵。幸而催科稍寬。則募人代

杖了事。萬一差迫緊逼。携家以逃。而官仍問之正身。必更鬻產賠納。雖大家亦破矣。

とあつて、經催(里長の別名)が一図の錢糧を催弁する事に依り、未納部分の賠償責任があり、富裕な戸はその労苦を忌避する事から、「無田赤棍」による包攬が発生した。しかし、これらの無頼の徒は包攬に伴う費用を受け取りながら徴収した錢糧を侵蝕し、結局はその責任が本来の經催に波及せざるを得ないという状況にあつた。崇禎太倉州志卷八賦役に崇禎年間の知州錢鹽棠が比較(錢糧の完欠の帳簿との対比)について述べている中にも、

往事里甲諸役。有田人戸。憚於奔涉。議一人代領其事。各甲出工食等分數無缺乏。然此人糧完則自比。否則復僱人應責。甚有得工食而逃。逃則復累正戸者。

とあり、里甲内の土地所有者は里甲制諸役に附随する労費を憚る事から、里甲で論議の上で他人にその任務を委託し、その賃金も各甲で分担して挙出している。ここでは、個々の契約の形ではなく、里甲全体で一人を雇募する形態を取っている。これらの事は、公的には認められない事であり、又結果的には被委託人の横領・逃亡等によって負担が反って増大する場合があるにもせよ、これらの場合、徭役は実質的に直接の力役から解放されて雇役化していると考えられるであろう。これが清初になると、順治年間浙江巡按御史であつた王元議が指摘している如く、

今該郡有一等攬盡。結黨朋奸。專以包當爲事。差役雜項。坊里人戸。最爲苦難。輪派到身。無計可誘。此輩反立爲一定門戸。不許

他人撻奪。小民旦暮承值。尚虞支應不能。此輩反年不辭。歲歲力任。人皆苦避。彼獨樂從。……聞。每畝索攬役銀若干。按畝而筭。不知歲該若干。（治安文獻二集 卷一・錢穀條約・申禁包攬）

ここでは、里甲制を基盤とする種々の徭役が一般民戸の義務から、ある特定階層の組織化された利権に転化してしまっている。しかし、包攬に要する手数料が「攬役銀」と表現されているように、同時に徭役の実質的雇募化の面を看過してはならないであろう。明末以降の賦役改革のテンポ以上に、鄉村での徭役の銀納化が進行していたと言う事もできる。ここに、明末以来の徭役体系の大きな破綻と共に、清初に於ける里甲制諸役の廃止及び里甲制それ自体の終焉の一要因を見い出す事ができるであろう。

清初に於ては、生員層が直接里甲制諸役に代充する例が見られるが、明末には果してそのような形態での包攬を見い出す事が可能であろうか。明実録・嘉靖十一年正月戊寅の条に、直隸巡按御史錢學孔の蘇・松等府の錢糧に関する条奏を載せて、

一。時徵解以杜侵欺。錢糧侵欠。多由姦徒包攬。或賄結官吏。憑藉勢要。不即徵解。延至日久。官吏遷代。輒圖埋沒。宜行府縣。禁革包攬。凡糧長・庫役。每歲一更。錢糧既完。務嚴限起解。歲終。以完解數目。籍報撫按。……詔如議。

とあり、徵解される錢糧が姦徒によって包攬され、優欠や期日の遅延が問題となり、糧長・庫役の一年更代と起解された数量の撫按官への報告を提案して認可されているが、姦徒が賄賂によって官吏と結託したり、勢要に依託するとあるように、背後に郷紳層の存在を推定する事も可能である。又、崇禎嘉興鼎志

卷十・賦役・「萬曆三十六年三院詳允坐廠碑記」に、白糧の解運に従事する北運・南運等の民運について述べている中で、
但有積棍攬頭・奸頑糧戶。假冒鄉紳・舉監名色。希圖會存營運。與一切作奸阻撓之輩。該縣查訪得實。即盡法招詳。

とあり、攬頭などが郷紳・舉人（監生）の名義を偽称して白糧等の解運に当る事が禁止されている。この場合も黒幕としての郷紳層の存在が推定できなくはないが、それよりも郷紳層が実役に就かず、民運の役を他人に委ねる事が警戒されているのであろう。崇禎松江府志卷十二役法一・役議・華亭知鼎紹昌の「官甲餘田起役議」（萬曆三十八年）に、郷紳の優免外の田土にも収兌糧長の役を科派しようとした事に対する反対意見として、
又以南北兩運。易收兌之役。何如。難者之口。始不能辦曰。縉紳無往役之體。子弟又非習事之人。非委家僮。則尋包攬。

とあって、郷紳には直接徭役に応ずる体面はなく、その子弟も事務に習熟している訳ではないので、徭役を科派されれば、実役に就くのは奴僕か、さもなくば他人の包攬に求める事をその理由としている。この事は、単に郷紳の逃口上ではなく、実際に有り得た事と考えられ、又この例にも見られるように、明末の均田均役法を中心とする賦役改革では、優免の特権―正確にはその拡大適用―により徭役を免除されていた郷紳にも、優免の制限と共に、その範囲外の土地所有面積に応じて徭役を科派する事が問題となつていたのであるから、清初の例のように、郷紳層が徭役に代充する形態の包攬の主体であったとは考え難い。郷紳も徭役を科派された場合には、一般民戸と同様に「棍徒」等の包攬に委託する傾向にあったと考えられ、生員等が直

接に里甲制諸役に代充する形態が見られるのは、より里甲制の解体化が進行する清代以降なのではないかと思われる。

二

それでは、清代以降問題となる郷紳層による包攬は、明末には如何なる様相を呈していたのであろうか。明実録万曆二年四月甲寅の条には、

浙江處州府麗水縣兩學被革生員鄭汝等奏辯。隆慶四年。緣本學生員朱昶。被縣民金瑞傑告欠餉銀。事發牽累。汝等二十二人黜革。舉賜超給。……刑科都給事中烏昇奏。鄭汝等。先因包攬稅糧拖欠。喧官司催併。遂率衆毆傷本管方面官員。仍勒出告示。激變人心。隨該撫按劾。奉旨。問遣爲民。

とあり、詳しい事情は明らかではないが、浙江処州府麗水県では、隆慶四年に同じ県学の生員が餉銀を滞納した事に連座して、生員二三人が生員資格を剝奪される事件が起きている。鄭汝等は税糧を包攬して滞納したばかりでなく、官司が未納分を追徴しようとした事を怒り、担当の官員に傷害まで与えたと言う。同じく明実録万曆三三年七月己酉の条に、御史孔貞一が挙人の行動について述べた言として、

如臺臣所云。武斷鄉曲。是閭右之豪也。囑託行私。是播間之乞也。違法取利。包攬錢糧。是市僧之事也。把持官府。侵害小民。是蛇蝎之毒也。捏造歌謠。興滅詞訟。是窮寄之奸也。

とあるように、挙人の日常化した弊害の中で、法令に違反して利益を取り錢糧を包攬する事を挙げている。この事を商人に類推して考えている事を見ると、或は一種の商業行為としての包

攬と考えられなくはないが、郷紳層による包攬が決して特異な現象ではなく、明末に種々の弊害を醸出した郷紳層の行為の一属性とも言ふべきものに成っている事は確認できると思われる。これだけでは、具体的に如何なる方法によって郷紳層による包攬が行われたのかは明らかではない。しかし、消夏閑記摘抄・中・明季生員の次の記事はその点で示唆を与えるものがある。

又貧生無力完糧。奏銷豁免。諸生中。不安分者。每日(月)期望。赴縣懇准詞十張。名曰乞恩。又攬富戶錢糧。立於自名下。隱吞。故生員有坐一百・走三百之語。

生員には富戸の錢糧を包攬し、自己名義として隱匿・横領する者がいるという。前段に言うように、全く納税が免除されれば、包攬した錢糧はそのままその生員の収入と成ってしまうであろう。又、郷紳層による直接の包攬の例ではないが、万曆秀水県志・卷三・食貨志・田賦に、初徵録を引用して、

彼總書餘戶糧不納外。輒又包攬里長。取糧時。運將兌運等項錢糧。寄在官戶名下。彼得縱其湊竄。而遲延拖欠。往往代伊比併。此其弊在淋糧。

とあり、總書は自己の税糧を納めないだけでなく、里長の役を包攬すると、その徴収する兌運等の錢糧を官戸＝郷紳名義にする事によって、納税を遅延し滞納している。總書と官戸との何らかの關係が推定できる。同じく初徵録には、

近時奸人暗利。輒起淋糧之弊。或細戶淋入官戶。影射難稽。或東區淋至西區。分洒莫覺。甚至包攬權利。隱漏入丁。弊出多端。莫可究詰。

とあるのも、錢糧の包攬・侵用が生じる原因には、細戸の錢糧

が官戸の名下に流入する場合のある事が窺える。以上の事に依り、郷紳層による包攬には、他人の錢糧を自己の戸名の下に集める事によって行われる場合のある事が推定できるのではないだろうか。

この他人の錢糧が郷紳名義化するという形態は、前述の如く胥吏等が帳簿上の操作をする事によっても可能であろうが、端的には、詭寄⁽⁹⁾民戸が自己の所有田土を郷紳名義にする—の場合にも發生する。同じく初徴録には、

縣總・區書。通同執法。業已成風。凡花分・詭寄・僉點運頭。皆出其手。卽如編審里長。惟田多者定役。彼受富室重賄。臨造冊前。將田推某富室名下。不作實收。如百畝之家。推去八十畝。止餘二十畝在戶。遂得規免重役。及過冊後。潛自收回。曰吾已回贖。甚則田去額存。一有拖欠。反將官戶比追。此其弊在飛詭。

とあり、県總や區書が編審の前に富室の賄賂を受けて、大部分の田土を郷紳名下に推取して重役を免除させる。詭寄を行った戸は、編審が過ぎてしまえば買い戻したといつて回収し、税額だけが官戸に残されるので、富戸の未納部分を反つて官戸が比較・追徴される事があるという。又、清初の例ではあるが、松郡裘均編要客行集「吳孝廉(欽章)上李侯均役條議」(康熙五年)にも、

一。議歸併。昔年編審。最難除者。花・詭二弊。今錢糧急迫。承值維艱。有管數不得人而寄戶受害者。兼之。近日有田之家。忽有意外家破糧迫。則冊主反受其害。所以非獨寄戶思脫冊主。卽冊主亦甚欲推開寄戶。

とあり、詭寄を行った戸が管數人(後述)より害を受ける為に

冊主から脱しようと思うだけでなく、寄戸が破産により錢糧を滞納すれば反つて冊主が害を受けるので、冊主も寄戸を冊籍から削除しようとしていると述べている。ここからは、清初の賦・役改革に伴う詭寄の動向が窺えるが、要するにこれらの史料は、詭寄を行った戸の錢糧は、それを受け入れた郷紳の戸の錢糧と見做され、合せて徴税及び納税が行われる事を示している。しかし、明代に於ける錢糧が基本的には里甲制諸役によって催弁されるという周知の事実からすれば、詭寄やその他の手段によつて、郷紳名下に他人の錢糧が混入したとしても、そのままでは納税の非合法的な請負行為としての包攬は成立し得ない。ところが、明らかに詭寄の形態の中に包攬という行為が含まれている例が見られる。即ち、雲間據目抄卷四・記賦役に、詭寄が錢糧の徴収を妨げる理由として、

其一。自貧儒偶職科第。輒從縣大夫干請替冊。包攬親戚・門生・故舊之田。實其中。如本名者。僅一百畝。浮至二千。該白銀三百兩。則令管數者。日督寄戶完納。及有司比較。結數二百七十兩已足九分。便置不比。是秀才一得出身。卽享用無白銀田二百畝矣。積以十計。則每縣無白銀田去二千矣。況十不足盡乎。又况所寄愈多。所侵愈甚乎。

とあり、生員が科擧に及第すれば、知県より書冊(官甲書冊¹⁰後述)を請求し、親戚・門生・知人の田土を包攬してその中に入れてしまふ。その為に、例えば自己の田土が百畝しかなくとも、詭寄の分を合わせれば二千畝にもなり、その分の錢糧が三百両であれば、管數者に寄戸を督促して完納させ、比較に及んで、その九割の二百七十両が納入されていれば、後は比較を行

なわなので、残りの二百畝分の錢糧三十兩は、この以前生員であつた者に着服されてしまふと言う。後述するように、松江府では隆慶初年に郷紳の田土を一般民戸の里甲から分離して官甲が設置され、郷紳の納税は郷紳自身の責任に於て為されるように成つていたから、この場合、明らかに寄戸の分の錢糧は、郷紳の奴僕乃至子弟と考えられる管教者（管数人）によつて代納されていると思われる。「包攬親戚・門生・故舊之田」という表現は、田土の詭寄を受け入れる意味と同時に、やはり税糧の納入の請負をも表わしているのである。猶、第二点としては、詭寄を行った郷紳の一族がその威に借りて半ば公然と納税を怠り、その為に一郷紳名下の未納分が一千兩以上にもなる事を述べている。

このように、郷紳の包攬という行為は、意図的であると否とを問わず、詭寄の形態の中に胚胎し、又増大していったと考えられる。しかし、この事を明確化する為には、明末に於ける徵稅方法——特に郷紳層に対する——が、どのようにして行われていたのかを説明する必要がある。

三

明代に於ける賦・役の銀納化とその一掃結点である一条鞭法の普及によつて、里長・糧長の手を通さず、各納戸が直接銀兩を納入する方式である自封投櫃が提唱された事は周知の事実に属する。例えば、万曆鎮江府志卷十二・賦役志・「徵解庫藏事宜」には、

一。折色并徭・里銀。設櫃于各縣之堂。各照區分。每區點收頭一

名管收。凡銀俱納戶親投。不得令糧・里包收。如納戶有故。倚托親族投納者聽。

とあつて、折色銀や均徭・里甲銀などは、櫃を県堂に設置し、区ごとに僉点された収頭がそれを管轄して納戸が自ら銀兩を投入する事とし、糧長・里長が包収する事は禁じられている。しかし、末尾に理由があつて親族に委託して投納する事を認めるという例外規定がある事は、包攬者に有利に作用したのである。事は想像に難くない。事実、万曆常州府志卷六・錢穀三・徵輸・嘉靖二十一年に、武進縣知縣徐良傳が均徭（十段法）について述べている中で、

況田野細民。投櫃銀兩。或假手于見年之里長。或包納於積年之歇家。多收少報。美入惡出。其弊滋甚。

とあるように、小民の自封投櫃すべき銀兩が見年里長に委ねられたり、歇家(12)による包攬となつて、そこに中間搾取が生じていた。又、崇禎松江府志・卷十二・役法二「萬曆庚戌（三十八年）華亭縣公紹昌收銀議」に、

更有衙役攬納。逼減天平。而積猾櫃書。尤慣包攬。磨洗官串。詭發附收。那東掩西。莫可究詰。既攬此而包彼。移後以飾前。接踵明奸。動侵千百。

とあつて、櫃書と衙役の結託による銀兩の包攬と侵蝕が指摘されている。後文に華亭県では甲乙等十櫃が設置され、收銀総催（櫃収）が、一櫃毎に六十三區を管轄しているところある事によれば、一応は折色銀兩の自封投櫃が行われているのであるが、櫃に配置された櫃書は納戸に自封投櫃をさせずに、「附收」の名目で衙役に徵収を任せているのであろう。このような自封投櫃の

困難性は、歿家・胥吏・衙役等による包攬の為と言うよりは、里甲制諸役の残存による事の方が大きかったかもしれない。万曆十七年に応天巡撫周繼は次のように述べている。

上納錢糧。不曰花戸自封。分日定限。庶得早完。則曰。着落經催。便於督責。豈知花戸盡交銀米於經催。而經催不盡交銀米於倉庫。(崇禎松江府志・卷十・田賦三・賦議利弊)

經催(里長)に徴税を命令する方が督責に便利であるという理由で自封投櫃が行われていない事がわかる。徴税上の技術的な問題と共に、里甲制諸役が存続している中での自封投櫃の非現実性が窺われる。

このように、自封投櫃は一般民戸に対しては、その施行の当初から機能していなかったと考えられる。しかし、郷紳層は折色納である銀兩ではなく、基本的には本色納である漕糧をも糧長・里長の手を経ずに自らが納入できたと言うよりも、そうすべく義務付けられた事実がある。先ず、漕糧については、明実録隆慶元年十月庚寅の条に、巡按直隸御史董堯封が、蘇州・松江・常州・鎮江四府の詭寄・花分田土を查出した事を述べた後に、

三均糧役。謂。地方糧役繁重。其間又有叠役・朋役之苦。宜將通邑戸田。分別等則。從公編審。而官籍大戸。則令其自兌以寬糧役。

とあり、糧役の繁重を軽減する目的で、等則に基いた編審と共に、「官籍大戸」に漕糧を自ら交兌させる事を奏上している。この意見は、この時点では戸部の「煩擾難行」という理由で却下されているが、翌年には認可されている。即ち、明実録隆慶二年四月己酉の条に、

巡撫應天都御史林潤。勘上御史董堯封奏丈量・出兌・優免事宜。其略曰。……所謂官籍大戸自兌者。蓋於水次增設倉廩。糧五十石以上者。每年如期上倉。官爲驗收。俟運軍至時。官爲交兌。是漕卒無久候之費。而糧長免包賠之患。……戸部覆奏。從之。

とあって、「官籍大戸」の自兌とは、糧五十石以上の者が水次に増設された倉庫に漕糧を納入し、これを官が検査・収納して運軍に交兌するという方法である事がわかる。これは清代に定制度化される官取官兌法の先駆的形態と言えよう。これも、漕卒の久待の費用をなくすと同時に、糧長の包賠を免れさせようとするものであった。この事は、それだけ郷紳層の滞納が多かった事をも示していよう。しかし、この隆慶二年の裁可は、単に既成事実を追認したものに過ぎず、江南地方では既に郷紳層の漕糧の自兌が行われていたらしい。即ち、明実録隆慶元年十一月己卯の条に、漕運都御史張瀚と總兵官李廷竹の會議を載せて、

一。蘇・松・常・嘉・湖官家。納糧不赴水次。每遇私兌。宜遵例禁革。とあり、蘇州・松江・常州・嘉興・湖州五府の官家(官戸)は、漕糧を納入するのに水次―水次の附近にある官倉の意であらう―に赴かず、私兌⁽¹³⁾を運軍に強制していた。同じく明実録隆慶二年八月丁亥の条にも、

御史蒙詔條上漕運十事。……一議私兌。謂。浙直士夫。近設自兌之法。使之明犯禁令。抑困漕運。不肖者。即重以自恣。而賢者又不獲全其戸名。宜仍舊官民公兌爲便。

とあり、浙江・南直隸の士夫が近頃自兌の法を設けているとあるように、郷紳層の漕糧の自兌は江南一帯でかなり広く行われていたと思われる。又、ここでも私兌を禁すべき事を述べて居

り、当初の意図に反して直ちに弊害が生じた事が窺われる。

このような税糧の納入方法の改革は、単にそのみに止まるものではなく、里甲の編制そのものの改変に波及するものであった。その一例は、既に、小畑龍夫・浜島敦俊氏等の均田均役法の研究の中で指摘された官甲（官図）の存在である。官甲について浜島敦俊氏は、崇禎松江府志卷十一・役法一の記事を引き、「郷紳からの税糧の徴収が難かしく、隆慶初年（一五六七年）に「官甲書冊」を立て、郷紳の土地は民戸の里甲から離して官甲に入れることになり、税糧の収納・比較には「知數」を用い、里甲の糧役とは交渉を無くしたのである。」

と述べられ、更に、「知數」とは「知數家人」とも言われている事から、「郷紳の族丁乃至奴僕が充当されたのであろう。」と推定されている。⁽¹⁵⁾ この結果、応天巡撫徐民式が、「吳中士夫。創立官甲。自辦自比。自收自兌」と述べ、天下郡国利病書原編第六冊・松江府に、応天巡撫林潤と原任松江府同知鄭元韶による均糧と丈量が行われた後の事として、

知縣張嶺建議。以官戸立官甲。米自兌軍。銀自赴比。不累催役。尤爲良法。

とあるように、漕糧と折色銀兩とは共に郷紳自身―正確にはその奴僕―によって納入されるようになった。猶、利病書では官甲の設置を隆慶三年（一五六九）の事としている。同様の事は、官図の設置された浙江嘉興府下でも見る事ができる。崇禎嘉興県志卷十「均田十議」に、天啓元年の知県蔣允儀の議論を載せて、

一。議限田兼論自運。……計其宦應免田若干。豁免若干。秀免若

干。共足限數。限外之田。照所均之數。一體編里。官與官爲伍。不難之以民。而皆聽其自運以稍存宦體。

とあり、郷紳の優免外の田土によって官図を作り、その税糧の納入は自運する事が許されている。但、既に指摘されているように、官図が設置されて郷紳にも里長・糧長等の役が科派される例があつて、一律には論じ難いが、その意図が貫徹し得なかつた場合が多く、均田均役法下の里甲は全く地縁性を喪失したものである事を考慮すれば、やはり官戸の自運が行われていた可能性は大きいのではないだろうか。⁽¹⁶⁾

このような郷紳層の納税方法と里甲組織の改変は、官甲（官図）が設置された場合のみには限らない。先に引用した初徴録にも、

前知縣由禮門。急爲禁革。每歲秋徵。除田多大戸。雖經撥補外圖而顯自運者。方聽併運。其他戶。各照本圖冊籍上納。不許淋推。淋收以滋宿弊。

とあり、秀水県でも、所有田土の多い大戸―郷紳層をも含むであらう―は、里甲から除外されて図外に分配され、税糧を自運する事が認められていた。しかし、それが先述したように官戸の税糧の中に他戸の税糧が混入するといった弊害を生じたので、知県由札門（隆慶六年―万曆五年在任）は、以前の如く一般民戸と合わせた運納方法を實行したという。しかし、大戸を里甲から分離する事がそのままであつたとすれば、これがどれ程実施されたかは疑問である。又、常州府下に於ても、官戸の税糧が里長によらずに自運される事は、万曆五年以前から行われていたらしい。⁽¹⁷⁾ 民国江陰県統志卷二二・石刻記・明「總由徵糧碑」

(万曆十一年十月)には、

一。大戸糧及五十石以上者。本戸自行出兌。銀兩亦自投納。另置一比較簿。每遇比較日期。著令總書署□大戸。大戸赴比。與糧長・經催不相干涉。

とあり、糧五十石以上という基準は、先に引用した実録の記事と同様であるが、先述の場合には、郷紳層に限定されていたと考えられるのに対して、この場合には、同書に、「糧長止是管收小戸糧米出兌。及解運銀兩。不得濫及比較。」とある事に依れば、郷紳層以外の富裕な民戸も、漕糧を自ら交兌し、折色銀兩を自封投櫃によって納入し、比較も他の民戸とは区別して行われていたと考えられる。更に、万曆常州府志卷六・錢穀三・徵輸には、

萬曆二十年。巡撫劉應麒・巡按甘士价。議立官戸。特以詭寄冒濫者。多偏累小民。諭令已故仕宦及監生官等項。前以官戸爲名者。盡行革去。其歲貢援例出身丁田。照例優免外。一例當差。其科甲原有數戸。盡令歸併。原有受寄。盡令推還。及令清查。刊刻書冊。分送士夫。親註字號。立爲官戸。其有寄莊外縣者。照式附列于後。總立子戸。應當差役。與小民一體編審。本名應納漕糧。與軍自兌。糧・徭銀兩。另櫃監收。如不完納依期。即差該圖老人催完。一體徵比。各舉人亦將本名下實有田數報出。附造官戸。

とあり、常州府では万曆二十年に舉人以上を対象として官戸が設置され、やはり漕糧は自兌し、折色銀兩は民戸とは櫃を別にして徴収され、遅延の場合には里老人が差催に当る事になっている。ここでは、特に官戸を里甲から分離するとは明記していないが、実質上は他の民戸から切り離されていると考えても誤りではないであろう。又、已に死亡している官僚や監生官(監

生の資格で官途に就いた者)等で、以前に官戸の名目を立てている者は革去するであろうに、ここで殊更に官戸を設置した理由には、一方で以前からの官戸の既得権を認めると同時に、他方では、優免の制限・詭寄の禁止・寄莊(県外に所有する土地)の当差と共に、官戸の範圍を制限する意図が存在したのであろう。しかし、この意図も、すぐに府志の編纂者でもあった唐鶴徵を中心とする郷紳層の反対によって頓挫したと考えられ、詭寄・寄莊等によって、官戸の範圍が無制限に拡大していく過程が推定できる。

このように、官戸はそれによって官甲(官図)が組織される場合以外にも、自らの税糧を自ら納入する事ができ、この方法は江南一帯に於てかなり盛行していたと思われる。とすれば、明末の種々の賦・役改革によっても、詭寄は容易に根絶できず、官甲などは反って詭寄を増大させた程であるから、郷紳名義の税糧として郷紳によって代納される部分もまた増大したに違いない。郷紳層による包攬という行為は、以上のような合法化された官戸の自運という徵稅方法の改革の中で胚胎した鬼子的存在と言う事ができる。

四

このような一般民戸とは区別・分離された郷紳層の納稅方法は、糧長・里長が郷紳層の税糧を催弁する事の困難さから生じたものであり、税糧の納入を各郷紳自らの責任によって行わせ、滞納を防止せんとする意図を有していた。しかし、この方法は、反って単に滞納を抑制する事ができないだけでなく、以前から

半は慣習化していた一般民戸と郷紳層との納税上の不均衡を顕在化し、延いてはその格差に基因する包攬を誘発せしめたと考えられる。

一般に、郷紳の優免には税糧が含まれないとされるが、徭役が銀納化されて丁・田に科派される均徭・民壯・雜弁銀等は、優免則例に照して免除される規定であった。このように、徭役が田賦の附加税と化すと、そこに優免の拡大解釈が生ずる余地が存在する。即ち、民国江陰縣志卷二二・石刻記・明「優免定額禁約夫馬碑」(万曆九年十一月)には、

一、查得 優免事例。原指雜泛差徭照丁糧編審者而言。若夏秋正税・本色・折色・起運・存留。不分軍・民・官・生人等。一體徵納。分毫不得優免。近聞。各處鄉宦。將自己田地。概稱照品優免。有司但知有例。而不知夏秋正糧不在免內。暗昧不察。或詭隨曲從。以致鄉官種無糧之地。小民包無地之糧。見任已免。革職亦免。身故猶免。有相傳數世。子孫全不納糧者。

とあり、優免は雜泛差徭(雜役)の丁糧に照して編審したものに限定され、正税たる税糧には及ばないにもかかわらず、郷紳は自己の所有田土が品秩に照して優免されていると称し、有司はその事を理解しないか、或は知っていても郷紳に屈從して言うがまとなり、郷紳は現職・革職・死亡の時を問わずに税糧を免除せられ、数世代の子孫が全く納税しない場合さえあり、結局はその分が小民に転嫁されているという。これ程極端ではなくとも、郷紳と民戸の納める税糧との間には明確な格差があった。それは税糧の納入に伴う附加税の場合である。前掲の華亭県知事聶紹昌の「官甲餘田起役議」には、

往事里排。催鄉官白銀。不惟主人難見如帝。管數人亦難見如鬼。徒倚侯門。吞飢忍凍。徒手而返。限杖難逃。……往事收兌糧長。收鄉宦糧糧。或插和水。或斛斗不准。既無衡尖。又無加耗。自立書冊。而官甲之糧糧。自收自兌。隱然充一收兌之役。

とあり、これは官甲設置以前の事を述べているのであるが、里・排(里長・排年)が郷紳の銀兩を徴収に行けば、本人には勿論、郷紳の家政を担当している管數人にも会えずに空しく引き返す他はなく、処罰を免れ難い。又、収兌糧長がやはり郷紳の糧糧(漕糧に充てる玄米)を徴収に行けば、郷紳の漕糧には米の品質が悪かったり、斛が規準のものでないばかりでなく、衡尖(尖米)・加耗等の附加米がなかったという。この事は、当然制度として許可されたものではあり得ないが、優免の対象であった里甲正役に対する雜役の關係が、税糧の正額と加耗の關係に類推される面があったのかもしれない。

このように、郷紳は税糧を滞納する事が多く、又、納入する場合にも、以前から半ば慣習的に附加税を負担しなかった。この事は、税糧の自運という徵税方法の変更によっても基本的には変化がなかったと考えられる。即ち、康熙無錫縣志卷三十・徭役に、明末無錫縣の人で浙江布政使であった龔勉が、実役負担者を援助する方法である役銀・役米について述べている中で、若郷宦・巨室。田至千畝者。皆爲自兌戸。自兌者。其銀貯庫。即正解錢糧。尚多掛欠。况役銀乎。

とあり、千畝以上の土地を所有して「自兌戸」となった郷紳・巨室は錢糧を滞納する事が多く、まして役銀などは負担しなかったと言う。又、反って自封投糧に藉りて粗惡銀兩による納入も

行われ得たであらう。⁽²²⁾ この官戸の自運が当初の意図に反して郷紳に有利に作用した事は、折色銀両の場合よりも漕糧の納入をめぐって、より鮮明に現出する。先に漕糧の自兌に伴って、官戸の私兌が問題となっている事に触れたが、江蘇省明清以來碑刻資料選集(以下碑刻資料と略記)常熟325漕務条約(万曆四七年三月)にも、

一。大戸糧米。俱要預□納倉廩。不許堆貯在家。逼軍私兌。

とあって、大戸が自分の家に漕糧を貯えて運軍に私兌を強制する事がやはり禁じられている。又、崇禎吳興志・卷九・役法に、崇禎十五年に巡撫黃希憲が白糧の官解を行った事に対する知県牛若麟の申文を載せて、

一。陳督催官戸之議。……獨吳之官戸條折。止比歇家。不及知數。倉米自儲待兌。不上官廩。要皆縣將最先。無後時耳。

とあり、吳県では官戸の條鞭折色銀は知数が比較に当らず、歇家がその代理をしているだけでなく、倉米も倉庫に上納せずに、自らが儲えて優先的に交兌するようになっていた。この事は、漕糧の検査と共に倉庫に納入する際の種々の労費を免れようとする事に由来する。碑刻資料・常熟・328邑侯京山楊公酌議漕政八款(崇禎三年九月)には、

六曰優膏衿以實倉廩。夫膏衿之宜優異也。所從來久矣。往(下缺)漕米堆貯水次。藏富於家。與官廩無異。□聽其便。諸生遂援以爲例。每至征糧時。紛紛求貯水次。責以入廩。則曰入廩有船脚之費。在廩有典守之煩。出兌又有守候之累。堅持前說。歲以爲常。第其中無田者。每挂寄他人米爲己米。或□收入。已經出兌時。始取償于備(下缺)之又遲。

とあり、歛文があつて不明な点があるが、生員は、倉庫に漕糧を納めると入倉の時に運送費を取られ、倉庫管理の煩があり、運軍との引き継ぎには順番待ちをしなければならないという理由で、水次や自家に貯蔵するのが定例となり、又生員で土地を所有していない者—恐らく税糧が五十石以上になる程には土地を所有していないという意味であろう—は、代りに他人の漕米を懸り寄せて自己の漕米とする者がいると述べている。この場合、明らかに生員が漕糧の包攬を行っているものと思われる。

又、これまでの規定では、税糧の自運が許されるのは糧五十石以上の者か或は舉人以上の階層に限られていたと考えられるのに対して、ここでは生員層一般にまでそれが拡大し、包攬が行われるまでに至っている。このような事も、糧長等の一般民戸が漕糧・白糧等を納入しようとするれば、衛官・旗軍・有司・衙役等による「常例・舊規」を名目とする種々の収奪—それは正規の額数と同額にもなる—を被らざるを得なかったのに対して、郷紳層は直接運軍に交兌する事ができ、その力関係から言っても、それらの陋規を免れていたと考えられるから、一般民戸が郷紳層に納入を委託するようになるのも必然の勢であると言わねばならない。「傍倉橫棍」による糧米の包攬と旗軍との結託による「折乾」が指摘されるのも、前掲の史料に、「常例盡革。倉蠹莫售其包侵」とあるような常例—陋規の存在がその原因であつた。更に前掲史料に、

至生員一概不准水次。悉照民戸上倉。亦聽公正總收總放。其耗贖量比民戸稍減。迄今上下帖服。糧已征完過半。不越旬日。便可十分足額。

とあるように、生員が水次に貯蔵せず、民戸と同様に倉庫に上納する事を条件に、耗贈(附加米)の負担を民戸より軽減する事が定制度化されるまでに至っている。明末嘉興府嘉善縣の郷紳・陳龍正の幾亭全書卷二九・政書・鄉紳七・漕運には、崇禎十三年に官收官兌法―郷紳・富室に限定されていた漕糧納入方法の一般民戸への拡大・一元化―が「奉旨通行」されたのにもかかわらず、結局浙江・南直隸でも行われなかった理由として、

官收官兌。實便小民。然稍不便於官戸。官戸從來漕規之外。毫無雜贈。且或米色稍差。今若官收。須照小民一槩乾潔。又倉廩出入停留。動以月計。勢必相折。豈能使糧官代賠。量每百正耗之外。須照小民。再加折耗米四・五石。交付在官。理難自處尊優。特勒加耗。爲此二端隱情。競言官收官兌之不便。小民無知。從而和之。

とあり、官戸には漕規以外に更に附加される雜贈―百石―ことに四・五石の折耗米―はなく、米の品質や納入に要する期日にも民戸とは差異があつて、この事が漕糧納入方法の画一化としての官收官兌に反対する理由となつていた。このように、郷紳の税糧の納入は極力その負担が軽減化される傾向にあつたのであるから、前掲の「官甲餘田起役議」に、

或有難縣司者曰。兌軍重役。何以加緡紳。卑職應之曰。南北兩運。何減于兌軍。況每年國戸。或依宦親央求帶兌。則便于官甲。而不便于民甲。

とあるように、郷紳の親属である國戸が漕糧を郷紳に附帯して交兌する事を望むのも故なしとしないであらう。まして、当時の郷紳は自己の奴僕を衙門の胥吏・衙役に充當させていたたのであるから、嫌が上にも納税上の特權的地位は強化されていたと

考えねばならない。とすれば、明季北略卷十二「陳啓新疏三大病根」(崇禎九年正月)に、

今何不幸而盡奪於中之縉紳乎。則何日而得其出。而流通於世乎。不獨不出也。彼且身無賦・產無徭・田無根・物無稅。且庇護奸民。賦徭糧稅。其入之未艾也。

とあるような、賦・役上の特權的地位を有していた郷紳の庇護を求める形で、一般民戸が郷紳に納税を委託し、その特權的地位に均霑しようとするのは必然的趨勢と云い得るであらう。ここに明末以降、郷紳層による包攬が問題とされる所以が存在したと考えられる。

小 結

以上、不十分ながらも、小稿では郷紳層による包攬を明代の賦・役制度史上の視点から捉える事を目的として論述してきた。一応それらを要約すれば以下の如くにならう。

明代の包攬にも種々の形態が存在するが、明末に見られる里甲制諸役に代充する形で包攬は、一方で利權化しつつも、他方では直接の力役を實質的に雇役化する側面があつた。しかし、郷紳層による包攬が、この形態によつて行われる事が主要であつたとは考え難く、他戸の税糧が郷紳名下に集積される事によつて発生し、その場合、詭寄の中にも包攬の要因が胚胎している事を推定した。そしてその前提的条件として、里甲制の解体化と賦・役制度の改革に伴つて、税糧徵收上の阻外要因となり、官戸と自称していた郷紳層を民戸とは里甲組織上分離して、それ以外の富裕な戸と共に、税糧の納入を糧長・里長の手を経ず

に自らの責任に於て行わせるといふ方法が、かなり江南地方に普及していた事を論証した。しかし、この方法は当初の意図に反して、以前から半ば慣習化していた郷紳層と一般民戸との納税上の格差を顕在化乃至定制化する作用を齎し、この郷紳層の持つ経済外的強制をも含んだ納税上の特権が明末以降の包攬を誘発せしめたと考えられる。

最後に、以上のような趨勢の清代以降の展開を推論する事が許されるとするならば、郷紳層の納税上の特権的地位は、基本的に継続したと考えられる。雍正年間には、生員や監生が儒戸・官戸の名目を立てて包攬を行う事に対する禁令が發布され、⁽²⁸⁾清末には、徴租と納税の大規模な包攬組織である租棧の経営者でもあった馮桂芬の「均賦論」に代表されるように、「浮収」の増大に伴う大戸(紳戸)・小戸間の不均衡―折銭率等の格差―が指摘されている。⁽²⁹⁾このように、清代を通して兩階層間の格差の系譜を辿る事ができ、そして、その萌芽的形態を既に明末に於て見出す事ができるのである。

(註)

- (1) 森田明「清代の議國制とその背景」社会経済史学四二(一九七六)・西村元照「清初の包攬―私徴体制の確立・解禁から請負徴税制へ―」東洋史研究三五―三(一九七六)・山本英史「清初における包攬の展開」東洋学報五九―一・二(一九七七)等参照。
- (2) 官戸とは制度として設置されたものではなく、郷紳層の自称に起源すると思われる。小山正明「明代の十段法について」千葉大学文学部紀要(一〇一九六八)二七―八頁参照。猶、皇朝經世文編卷一九・戸政・巡按御史趙宏文の「請均賦役以收民心疏」(順治二年)には、「竊照。江南有官戸。有民戸。復有子戸」とあって、官戸という名称は清

極初にも特に江南に於て顯著であったと考えられる。又、山根幸夫氏は「官戸とは、郷宦・華監・生員・雜職・省祭・知印・吏承等の戸を含めたものである」(「明代徭役制度の展開」一七八頁参照)と述べられ、優免が適用される全ての戸を対象とした名称であると解釈されているようである。しかし、康熙金壇縣志卷三・里甲には、

按編戶之法。分隸十區。有官戸・儒戸・役戸・民戸之別。……其登仕籍者爲官戸。博士・弟子爲儒戸。吏書各役爲役戸。

とあって、胥吏と共に、生員層とそれ以上の階層を区別している例が見られるので、官戸を略郷紳層に比定しても大過はないと思われる。上級郷紳と下級郷紳を区別すべきであるとの意見も斟酌すべきであるが、小紳では、便宜上、民戸とは明確な差異を有する生員以上を郷紳層として取扱う。

(3) 前掲・森田・山本論文参照。清初には、生員等が里役に代充する例が見られる。

(4) 皇明條法事類彙編卷八・貢舉非其人「禁約罷閑生員吏(典)与并官舍人等充當里長及當求管事」及び同書卷十五・多収稅糧「戸口塩鈔不許勢要發賣并慣熟解人多收粮草物料價銀及官員擬容充軍降級例」参照。

(5) 正徳年間に刑科給事中であつた毛憲の「言庫藏積弊疏」(皇明經世文編卷一九〇)参照。猶、毛憲は税糧物料等の納入をめぐる京師の「攬戸」による包攬にも言及している。小稿の言う郷紳層による包攬とは、郷村社会内部に限定して居り、商品流通を背景とする包攬に郷紳層が関与する事を否定するものではない。

(6) 嘉治初年に戸部尚書であつた梁材の「復議財用疏」(皇明經世文編卷一〇二)参照。

(7) 均田均役法については、浜島敦俊(1)「明末浙江の嘉湖兩府における均田均役法」東洋文化研究所紀要第五二冊(一九七〇)・同(2)「均田均役の実施について」東洋史研究三三―三(一九七四)・同(3)「明末南直の蘇松常三府における均田均役法」東洋学報五七―三・四(一九七六)・川勝守「明末江南五府における均田均役法」史学雑誌八五―一六(一九七六)等参照。

(8) 前文に、「具初徵錄。萬曆十四年。黃洪憲與郭中尊論田糧積弊書」と

ある。黃洪憲は秀水県の人、隆慶五年の進士、侍読学士等の官に任じられ、万曆秀水県志の編纂者でもある。彼の文集「碧山學士集」卷十五書案には略同文が収められている。郭中尊とは当時の秀水県知縣郭如川（万曆十四・十九年在任）の事である。この書簡には、田糧の弊害の原因を胥吏層に単純化しようとする意図が感じられる。

(9) 清代の例ではあるが、光緒会典事例卷一七二・催科禁令・雍正二年の条に、「聞、不肖生員、監生、本身無多糧。倚恃一袴。輒敢包攬同姓錢糧、以爲己糧」とあり、皇朝經世文編卷二九・戶政・杭嘉湖道徐鼎の「請稽保甲以便徵輸疏」（雍正五年）に、「或投託豪戶名代納。任其侵蝕。無從稽考。」とあるのも、この事を裏付けるであろう。

(10) 但し、詭寄の範圍が県単位を越えている場合には、立籍地で納税が行われたと思われる。前掲小山論文参照。

(11) 事実、明史録万曆二十一年四月甲辰の条に、勢豪の滯納を清查すべき事を述べている中で、嘉靖二十六年の進士で右副都御史・兵部左侍郎・南京兵部尚書等の官を歴任した太倉州の人、凌雲翼が二千餘両の錢糧を滯納している事を記載している。

(12) 諸負宿屋とも言うべき歛家については、一先ず前掲西村論文参照。

(13) 私兌とは、本来官倉に運納すべき糧米を直接運軍に交兌する事を言う。明律卷七・戶律四問刑条例・收糧違限条附參照。猶、星斌夫氏は、既に嘉靖年間（に）税糧数百・千石以上の「江南勢豪之家」が、糧長の手を経ずに自運し、私兌の弊害が問題になっている事を指摘しておられる。「明代漕運の研究」日本學術振興會（一九六三）第三章第三節糧長の諸弊・一六・一三頁参照。

(14) 小畑龍夫「官圖・儒圖・僧圖・軍圖について」山口大学文学会誌九（一九五八）・引用文は浜島前掲(1)論文一五五・一六頁参照。この知数とは、雲間據目抄卷四記賦役に、

故嚴査之法。須將各宦書冊。每年自十月立限。至來年二月止。撫臺先于二月以內。弔取書冊。府縣即將管數人同冊解査。其有完納無欠者。若有司以禮旋異。

とあり、官甲書冊に編入された郷紳の納税状況のチェックは管數人を用いて行ふ事を述べて居り、応天巡撫周繼も、「一。比較錢糧。除官戸

照舊印發書冊。另立限期。責令老人押各管數人赴比外。」（崇禎松江府志卷十田賦三・賦議利弊）と述べて、里老人の督責の下で管數人が比較に赴く事になっている。よって、知數（知數家人）とは管數人（管數家人）とも言われ、恐らく佃租の徴収などの實際の土地経営に携わる所謂「紀綱の僕」の類であろう。管數家人が詭寄を行つた戸の佃租の徴収を請負う可能性も存在する。猶、官甲が設置されて税糧の収納・比較には知數を用いると言う場合、知數が一般の里長と同様に他の官戸の税糧の催弁に当ると解釈されなくては、先の史料にも見られるように、税糧の徴収・納入は各官戸別に行われていたと考えられる。

(15) 江蘇省明清以來碑刻資料選集・生活・讀書・新知三聯書店（一九五九）無錫郊無錫縣均田碑（万曆三十九年九月）參照。

(16) 前掲浜島(1)(2)論文・川勝論文參照。川勝守氏も述べておられるように、特に浙江の均田均役法下の実際の税糧の徴収方法については不明な点が多い。しかし、崇禎嘉興縣志卷三・藝文志・知縣張鳳翥による均田均役法に対する郷紳虞廷陞の「嘉邑均田均役議」（崇禎七年）に、更査。向來免田。俱掛各里各甲之後。不入正里數內。則免益多。而田益少。今議。免田照例定額外。約算各紳田若干。存官戸之名。統填入里甲。約填六十里。以官戸知數人充之。是可代小民六名。百里里長。

とあり、それまで郷紳の優免田土を里甲の末尾に附帯した結果、その増大と共に徭役科派の対象である田土が減少したので、優免を定額に制限すると共に、その優免田土によつて六十の里甲（官圖）を設置したという。この官圖は優免田土によつて構成されているのであるから、徭役科派の対象とはならない訳である。とすれば、小民の六百名の里長に代えうる官戸の知數人の任務とは官戸自身の税糧の納入以外には有り得ない事になる。又、優免の田土によつて官圖が設置されて里長を科派されると言つても、それは徭役科派の基準となるものにすぎず、實際に一官圖に十名の里長が存在する訳ではない。嘉善縣では郷紳の優免外の田土が里長四・五名以上（四・五甲分）になったという。（前掲浜島(1)論文）とすれば、一官圖には二戸未満の戸しか存在し

ない事にならう。

(17) 万曆常州府志卷六・錢穀三・徵輸に、万曆五年に巡撫宋儀望が里こ
とに一人の糧長を僉点する方法である國運法を行った事に対する唐鶴
徴の反対論の中で、「且謂之勢豪、必官戸也。子不言乎。官戸既已自
運矣。」とある。

(18) 同条に附記した唐鶴徴の言に、

朱撫臺嘗問曰。何以貴鄉舉人・粟監。俱冒官戸。鶴徴答曰。諸聞
公祖之立官戸意。在優厚結紳乎。或緣嚴給紳乎。撫臺大笑而罷。

とある。因に、朱撫白とは劉應麒の後任の巡撫朱鴻猷(万曆二十一年・
二十二年在任)の事である。

(19) 前掲浜島(1)論文一五五―六頁参照。

(20) 徭役の銀納化及び優免規定の変遷については山根幸夫「明代徭役制
度の展開」東京女子大学学会(一九六六)・和田正広「徭役優免条例の
展開と明末舉人の法的地位」東洋学報六〇―一・二(一九七八)等参
照。

(21) 附加米と一口に言っても、時間と場所及び税糧の種類によって差異
があり、一概には論じ難いが、蘇州・松江等の万曆年間の定例では、
兌運糧(正兌米)の場合、一石毎に加耗米五斗六分・而尖米一斗・合
計六斗六分が附加され、この内二斗四分が一錢二分に折銀(二四錢廩)
される。折銀部分は米価動向に左右されるので、単純比較は必ずしも
正確ではないが、これらの附加米があるとなしでは六―七割の負担
の差が生ずる事になる。しかし、これらはいくまでも正規の耗米であつ
て、納入する側から言えば、臨時的な附加米や賄賂に類する種々の手
数料の方がより負担が過重であつたと思われる。詳しくは、前掲星著
書第五章・漕運法の発達と耗米・脚米の問題参照。

(22) 関世編卷六徭役に、糧役系の分化した徭役である收催(收銀総催)
の勞苦について述べている中で、
收催到糧。則聘算書有費。坐糧釋收。則勢豪衙紳。包攬親戚完糧。
低色輕銀。不敢爭上粟。

とある。

(23) 碑刻資料常熟縣草漕白陋規帖附禁約(泰昌元年十一月)参照。

(24) 同右巡漕務條約(万曆四十七年三月)参照。「折乾」とは、前掲西村論
文では割引きの意に解釈しておられるが、本色を納めずに銀兩に折取
して中間搾取を行う事であろう。明律卷七・戸律四倉庫・問刑條例転
解官物案附に禁令がある。皇朝經世文編卷二九戶政・給事中姚文然の
「因災請折漕米疏」(順治八年)にも、「又數年來。漕政積壞。兌米水
次。將銀折米。留米於南。挾銀而北。名曰折乾。」とある。

(25) 漕規とは陳龍正に依れば、百石毎に浙江で九石八斗・蘇・松で四・五
石附加される耗米をいう。官收官兌に反対した理由には、この耗米が
六石―十石程度増加する事もあつたという。清代に定額化される漕載・
漕贈(銀米)等の前身であろう。勿論明代の定額にはなく、加耗外の
加耗とも言うべきものである。

(26) 松江府に於ても、隆慶三年の官甲の設置と同時に、富裕な戸によつ
て團戸が設置され、官戸と共に漕糧を自運し、万曆二〇年には官戸と
團戸のみによつて兌運糧が負担されるようになった。雲間據目抄卷四・
記賦役参照。

(27) 小山正明「明末清初の大土地所有」(史学雑誌六七―一(一九五八))
参照。陳龍正の幾亭全書卷三〇政書・鄉黨八・撫按事宜にも、
一。禁豪僕充衙役。豪僕不許充各衙門員役。小則充撥公事。歸之
主人。甚則陰伺守令短長。報主人牽制之。於是。勢豪所欲。爲守
令弭耳之聽矣。

とあり、郷紳の衙門に対する影響力の大きさと共に、衙役の包攬にも
郷紳の影が感じられる。

(28) 光緒會典事例卷一七二・催科禁令雍正二年の条、及び清史稿雍正二
年二月戊午・同雍正四年四月戊子の条参照。

(29) 抗糧闘争等をめぐって言及され、関係論文は多いが、村松祐二「近
代江南の租糧」東京大学出版会(一九七〇)・高橋孝助「咸豐三年前後
の江南における均賦論」宮城教育大学紀要一〇(一九七五)・小林幸夫
「清末の浙江における賦稅改革と折錢納稅について」東洋学報五八―
一・二(一九七六)等参照。